年間第５主日

第一朗読　ヨブ７・1-4、6-7
第二朗読　一コリント９・16-19、22-23
福音朗読　マルコ１・29-39

2024.2.4　9：30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭　高木健次神父

今日の第一朗読はヨブ記という旧約聖書の一つの書物からとられています。そこには――ヨブ記には今日は深入りする時間がありませんが――ヨブが自分の苦しみについて神様の前で嘆いている、そういう言葉の一部分が朗読されました。人生は苦しみ、苦労しかない、そういう内容でした。

この世はどんな人でも苦しみを経験しない人はいない。いろいろなレベルで苦しみがあります。そういう意味では、名もないヨブの叫び、多くのいろんなヨブの苦しみの叫びにこの世は満ちていると言わなければならない側面もあるでしょう。

一方で、今日の福音はイエス様が多くの人の病気をいやし、また、悪霊を追い出されたという、そういうイエス様のなさっているところが朗読されました。第一朗読で苦しみの嘆きの言葉を、そして、福音朗読でイエス様のいやしの業（わざ）を語る、今日の朗読の配置を通して、教会は、人々の苦しみに対する答え、そしてその苦しみを克服する道をイエス様がお示しになって、道を開いてくださったという信仰の神秘を表現しているということができます。しかし、イエス様は人々の苦しみを克服されたけれども、無条件に取り除かれたということではない、というのがわたしたちがいつも思い起こしている十字架を通して復活へ歩まれ、その道へ招かれる、そういうイエス様の神秘なわけです。

イエス様はご自分が神でありながら人となって人々の苦しみを担う、全ての人の苦しみを十字架を通して担われました。そうして苦しんでいる人々に、神様が一人ひとりの苦しみを放っておいて遠くにいらっしゃる、そういう方ではない、むしろ共に、いやそれ以上に苦しみを担っていらっしゃる方であることと、苦しみを通して、神様と断絶している、そういう人間の現実を乗り越える、その道が与えられたことを示されました。イエス様はご自分の十字架によって苦しみの意味そのものを変容された、変えられたと言うことができます。それはあたかも、ミサのたび毎にパンがイエス様ご自身の体に変えられている、イエス様がパンをご自身の体に変えてくださるように、人々の苦しみを救いへの道へと変えてくださるようにです。

苦しみの中にあるとき、どんな中でも、神様から遠く捨てられたように感じる、また、他(た)の人からも取り残されたように感じる、自分だけがその苦しみの中にあるように感じる。そのように神と人とを分かってしまう、隔てる、そういう意味で苦しみは悪霊の道具でありました。しかしその苦しみをイエス様ご自身が担うことを通して、一人ひとりがイエス様に繋がり、また、イエス様に繋がることを通して、苦しんでる者同士が神のもとで繋がっていく、そういう聖霊の道とされたということです。

例えば、パウロの経験を見ましょう。パウロは復活の主に出会っての力を目の当たりにすると言いましょうか、復活の主の恵みを受けた。そうして、実は自分の苦しみを通してイエスご自身に出会う、イエスご自身と繋がるっていう、そのことに目が開かれるわけです。そして、それだけではなくて、その自分の苦しみ、イエス様と繋がる苦しみは、すべての人類のためのあがないの業に参加することなんだ――あがないって難しい言葉ですね。今でも教会の中だけでわたしは聞くような気がしますけども、それは神様と隔てられた状態を乗り越えるための神様の、イエス様の恵みの業です――そのイエス様の業に参加する、それが自分が苦しむことの意味なんだという思いにまで到達しているわけです。それで最後にパウロは「あなたがたのために苦しむことを喜びとしています」（コロサイ 1・24）とまで言える、そういう境地に達しています。復活の主に出会って、そしてある意味でイエス様が示してくださった救いの道はご自分の十字架と、十字架を通して復活に至るという道ですけども、わたしたちはパウロのように復活の主に出会って、その力に支えられて自分自身の十字架を恵みとして受け取ることができるようになっていく。復活から十字架へと言えるかもしれません。そしてその恵みによって担えるようになった十字架を通して復活へと至るのでしょう。

ある修道院のシスターが、もう亡くなりましたけども、元気なころは色々な所で活躍されたそのシスターですが――晩年はご病気で修道院でずうっと療養して通院しておられました。そういうときに、シスターは「わたしはこの修道院で病気の係なのよ。だから、病気はわたしが引き受けるから、みんなは外で頑張ってね」っていつも言っていたって聞きました。シスターにとっては繋がっているわけです、ご自分の病気と他の人の活動が。その「病気を引き受ける」っていうのは、病気を通してイエス様の救いの業がその所に具体的に表れているっていう、そこにイエス様のあがないの業が現れているっていう、だからこそその苦しみがみんなのためのものになる。それは信仰によってのみ見出すことができる神様の恵みへ至る道、神秘と言うことができるでしょう。

しかし、その苦しみを担うっていうことが救いへの道――自分がイエスに出会うだけではなくて、すべての人が神様のもとへたどり着くそのみ業に参加することなんだと言うならば、じゃあ、病気が治るようにいろいろ治療を受けたりとかしてはいけないのか、問題を解決することはその救いの業を拒否することになるのか。そうではないわけです。苦しみっていうのはいろいろなことを克服しようとして、しかしそれでもなお降りかかって来ることが苦しみですから、ただただ受動的に我慢しなさいという意味ではないわけです。

また、他の人が苦しんでる人に対して、例えば「あなたが病気の係だから、じゃあ病気で頑張ってね。わたしたちは関係ないわ」とは言えないわけです。イエス様の苦しみにわたしたちが一人ひとりの苦しみを通して参加するように、その目の前で苦しみの中にある人には共にそこに担う――同じように病気になる、分かち合うということは出来ませんけども、いろいろな形で――病気に限らずいろんな苦難を共に解決しようとする、あるいはそれができないときでも逃げることなく共に留まる――自分がなんにもできない、相手のためになんにもしてあげられないときに、そこに共にいるっていうのはある意味で辛いことです。しかし、十字架のもとに留まられたマリア様のように留まる、それも苦しみを分かち合う、参加するということになります。

そうして、人と人、神と人とを分け隔てるはずの一人ひとりの苦難の体験が、むしろ互いを繋げ、神様とすべての人を繋ぐ道になっていく。そのように一人ひとりがイエス様の十字架に参加するように信仰を通して呼ばれているということを――それはほんとに簡単なことではありません。そして辛い一つの呼びかけなわけですけども――ときどきそのように思い出さなければならないことだとも言えると思います。

わたしたちはそれを自分の力で成し遂げるのではありません。パウロのように復活の主に出会って、イエス様に支えられて、だんだんに自分の人生の歩みの中で、苦しみを、自分の中のいろんな苦難を担っていくことを主と共に学んでいくということができると思います。

今日、ごミサを通してわたしたちはまた一人ひとりの中に復活したイエス様をお迎えします。そのイエス様に信頼する思いを新たにしたいと思います。そして、一人ひとりの苦難、また他の人々の苦難を共にイエス様に繋がって担い合う、そういうことを通して、この世の神様のあがないの業――ご自分とこの世界を繋げるために用いてくださる――その信頼を新たにしたいと思います。一人ひとりの中にいらっしゃる復活の主に委ねて、このごミサを通して恵みを受けましょう。